

大学史ニュース

第17号

令和元年7月8日 発行

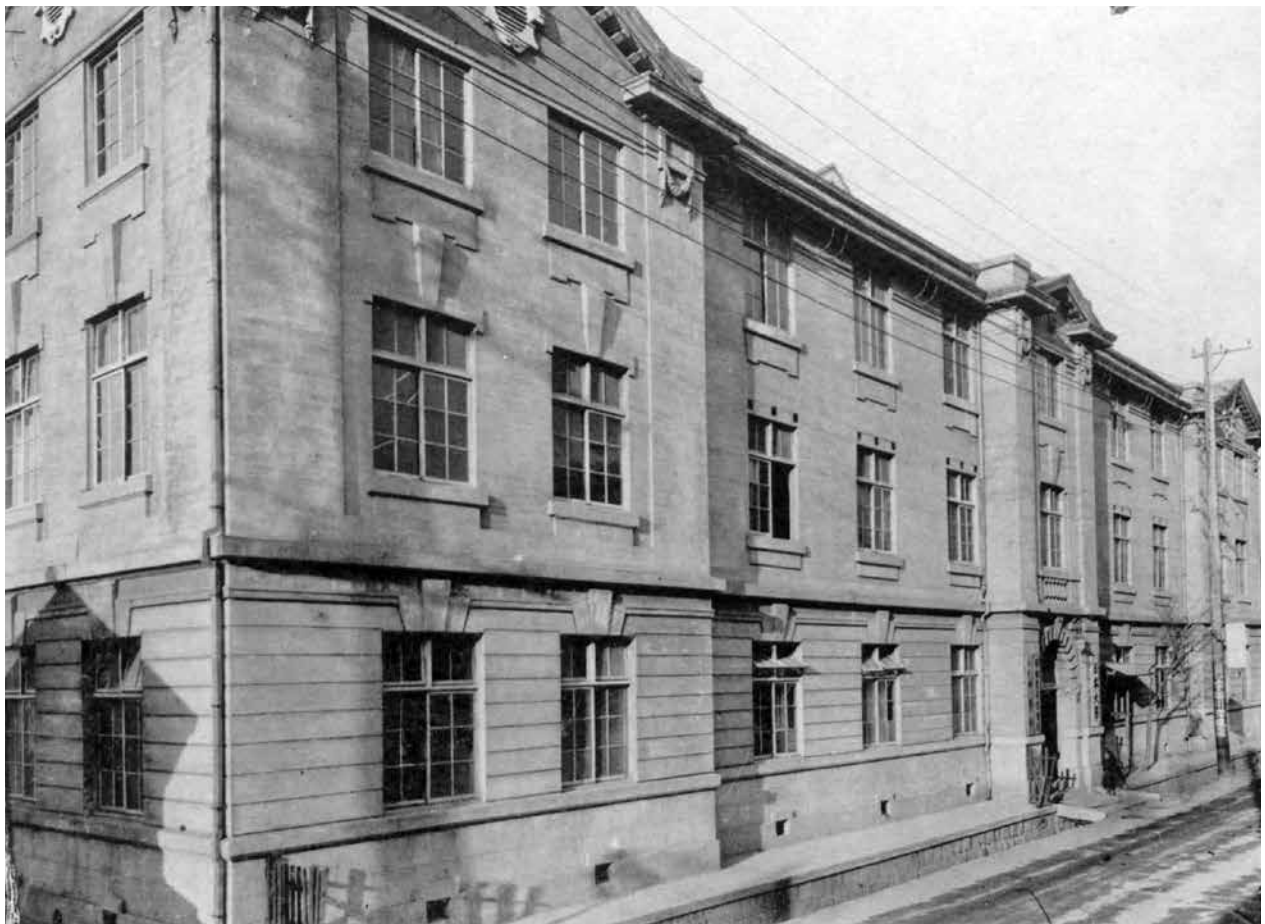
目次

資料紹介

- ◇明治13年 東京地学協会報告 全 …………… 2
- ◇松岡康毅関係資料の寄贈について…………… 4

連載

- ◇海軍主計官となった日本法律学校出身者②…………… 4



100年前に使用されていた日本大学三崎町校舎（高等師範部修身法制経済科卒業アルバムより）

今からちょうど100年前の大正8（1919）年、「高等師範部修身法制経済科卒業アルバム」に掲載されている当時本学が使用していた校舎の写真です。この校舎は、大正2年、日本大学中学校設置に合わせて竣工した校舎で、大学と共用の校舎でした。三崎町校舎は明治29（1896）年に神田区三崎町（現千代田区神田三崎町）の土地を借り受けて平屋造りの校舎を建築しました。その後、明治32、34年に増築し、明治35年には2階建て校舎となりました。しかし、この校舎だけでは学生を収容することができなくなり、大正2年に写真の3階建て校舎を建設しました。その後、大正9年の大学昇格に合わせて、さらに3階建校舎を建設しました（前号表紙写真参照）。

資料紹介 明治13年 東京地学協会報告 全



山田顕義の年譜（『山田伯爵家文書総目録』）をみると、明治12（1879）年4月18日の項に東京地学協会議員に選任されるとあります。山田は、軍人・政治家として政府の中心で活躍していましたから、懇意の人々に請われて各種団体の創立発起人や会員に名前を連ねており、東京地学協会もそのひとつということでしょう。

東京地学協会（現・公益社団法人東京地学協会）は、「外交官として欧州各国に駐在していた渡辺洪基・鍋島直大・長岡護美・榎本武揚4氏が、ウィーン、ロンドン、サンクトペテルブルクの各王立地理学協会の会員となり、地学が国の発展に大いに貢献していることを見て、文明開化を急ぐわが国にもこのような協会が必要である」と痛感し、帰国後に桂太郎・花房義質とともに創立委員となり、赤松則良・北沢正誠・佐野常民・塚本明毅・福沢諭吉・福地源一郎・山田顕義を幹事として、明治12年4月18日に創立されたということです（東京地学協会HPの「沿革」より）。山田顕義は、創立時には幹事の一人として名前を

連ねていたようです。

東京地学協会の設立の事情について『明治ニュース事典』（Ⅱ）に次の記事が載っています。『東京日日新聞』明治12年4月23日「榎本武揚副社長ら幹事議員決まる」の見出しで、「公告。去る十八日の職員選挙会に於いて、左の通り決定せり。

副社長＝榎本武揚・鍋島直大

幹事＝長岡護美・渡辺洪基・桂太郎・北沢正誠 以上4名

議員＝榎本武揚・赤松則良・鍋島直大・長岡護美・渡辺洪基・桂太郎・北沢正誠・佐野常民・福地源一郎・山田顕義・塚本明毅・福沢諭吉 以上12名。

この旨各社員へ報告す。」

とあります。地学協会は、北白川宮能久親王を社長（会長のこと）と称しており、会員は社員とよび、役員は社員による投票選挙で決まりました。

今回紹介するのは、学祖山田顕義の動向を窺う資料として入手したもので、東京地学協会設立初期の活動報告書ともいえる『明治十三年 東京地学協会報告 全』と題された合冊本です。「東京地学協会第二年会記事」と題して、いわば創立2年目の年度初めからの記事になるのですが、何故か、最初は14年4月16日付け、宮内省より恩賜金1000円の伝達で始まります。その後5月3日付けで、第二年会が芝延遠館で開催された記事で、来会者は、次の通りです。

社長＝北白川能久親王

副社長＝榎本武揚

幹事＝渡辺洪基・桂太郎・赤松則良

議員＝柳猶悦・九鬼隆一

社員＝鍋島直虎・鍋島直柔・島津忠亮・内藤政拳・堀江芳介・荒井郁之介・小牧昌業・鄭永寧・松平忠禮・松平信正・小笠原忠忱・高島眉山・河田巖・伴鉄太郎・中村雄飛・星亨・中牟田倉之介・光妙寺三郎・児玉淳一郎・町田実一・張滋昉・丹羽雄九郎

賛成員（招待者）＝東京府知事松田・米国公使ジョン・ピングラム・英国代理公使ゴルドン・ゼー・ケネデー・正五位南部利恭・安田善次郎等

得票数

29票	赤松則良
27票	柳猶悦・北沢正誠
26票	桂太郎
24票	井上馨・塚本明毅
22票	伊達宗城
21票	福地源一郎・榎本武揚・佐野常民
20票	九鬼隆一
19票	山田顕義
18票	渡辺洪基
10票	小牧昌業・荒井郁之助・品川弥二郎
8票	小沢武雄・川田剛・鄭永寧
7票	蜂須賀茂韶・伴鉄太郎・大山巖・曾根俊虎・高島眉山・近藤真琴
6票	伊地知貞馨・川本清一・大給恒・谷干城・上野景範
5票	青江秀・林清康・中井弘
4票	石井省一郎・伊藤博文・石黒忠憲・堀江芳介・星亨・大隈重信・沖守固・芳川顕正・曾我祐準・小森沢長政・塩田三郎
3票	丹羽雄九郎・小野梓・大木喬任・南郷茂韶・松浦詮・松平信正・松平忠禮・河瀬秀治・児玉淳一郎
2票	丹羽龍之助・岡本兵四郎・渡辺驥・河田巖・立田革・伊達宗徳・内藤政共・栗塚省吾・松平慶永・浅井道博・三浦梧楼・島津忠亮
1票	(略)

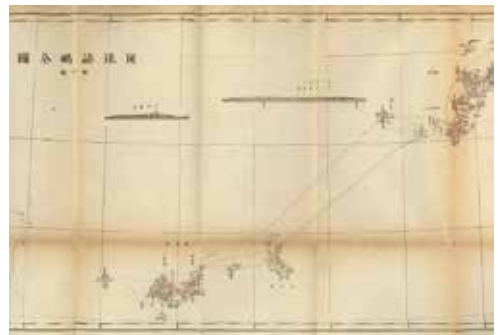
続いて事業報告があり、終了後北白川社長から次期議員について選挙会を行う旨が伝えられました。なお、渡辺幹事から都合により本期より議員6名・資金取締役2名を増加する旨報告あり。次期議員の選挙結果は表の通りでした。

選挙の結果、29票～8票までの18名（太字）が議員に選ばれましたが、実は山田顕義の名前はありませんでした。選挙結果の最後に「但し、山田顕義氏ハ議員ノ投票多数ナルヲ以テ其員中ニ列ス可キナレトモ已ニ前期ニ於テ議員ヲ辞セシ事アルヲ以テ本期モ亦除名ス」と記され、協会発足間もなく議員を辞退したようです。

ここまでが明治14年の報告なのですが、次になると、13年1年間の社員（会員）の演説・論文等が、次の如く乗せられています。

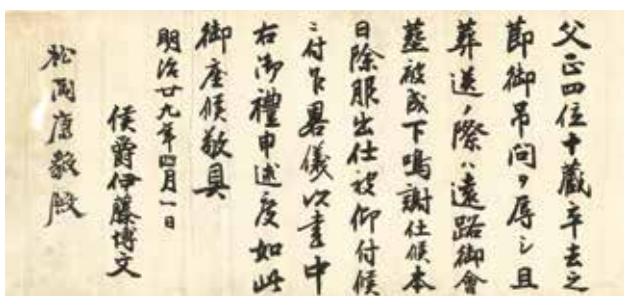
- 第1回（4月24日） …伊地知貞馨（琉球沿革地理の第2回）
- 第2回（5月29日） …青江秀（近古外交志〔文禄～寛永間の対外貿易歴史〕）
…黒岡帯刀（*烏拉潮斯徳紀行）*ウラジオストック
- 第3回（6月26日） …河田巖（日本地誌の源委を論ず）
- 第4回（9月25日） …益満邦介（清国揚子江紀行）
…川本清一（*波斯地理並沿革）*ベルシャ
- 第5回（10月30日） …浅見忠雄（豪州紀行）
…川本清一（波斯地理並沿革）第2回
- 第6回（11月27日） …本宿命命（印度孟買紀行）
- 第7回（12月25日） …塚本明毅（日本国郡沿革考）
…本宿命命（波斯航海記事）
- 第8回（14年
1月29日） …白野夏雲（上代地名考・蝦夷語考）
…浅見忠雄（豪州紀行）第2回
…佐々木猛綱（本邦及*新西蘭土の関係）*ニュージーランド
- 第9回（2月26日） …福島安正（*多倫諾爾紀行）*モンゴル自治区ドロンノール
…北沢正誠（蝦夷経略考）
- 第10回（3月26日） …塚本明毅（日本国郡沿革考）第2回
…白野夏雲（皇国名宝石の産する原因説）
…中田敬義（北京南下紀行＝北京～上海まで）

このように、東京地学協会は、その設立は政治家・外交官・軍人・貴族（華族）会員で構成されましたが、会の活動はまったくの専門的立場・研究による啓蒙活動だったことが分かります。



(田淵) 琉球諸島全図（伊地知論文付図）

松岡康毅関係資料の寄贈について



伊藤博文書簡（会葬御礼）

作成者は平沼騏一郎、鈴木喜三郎、水野錬太郎などの本学関係者のほか、高橋是清、加藤高明、穂積陳重、大倉喜八郎など、政財界、法曹界の著名人ばかりです。康毅の交友関係を知る上で興味深い資料といえます。

上記の書簡は康毅の嫡男である均平宛^{きんぺい}の書簡ですが、写真の康毅宛の伊藤博文書簡や、榎本武揚書簡^{たけあき}も含まれていました。130周年となる本年に、日本大学の草創期を支えた松岡康毅関係資料を御寄贈いただきました松岡常成様に御礼を申し上げます。

(松原)

海軍主計官となった日本法律学校出身者②

明治26（1893）年で独自の主計官養成機関を廃止した海軍でしたが、主計官への志願者は少なく、打開策の一つとして試験科目の外国語と簿記を随意としたため、質も低下する結果となりました。この時期、ロシアに備えた軍備拡張の時期でもあり、海軍省経理局は、質と量の確保のため、31年に高等商業学校（一橋大学の前身）に依託学生※を置く方針を打ち出し、32年から主計学生として高等商業学校と第三高等学校法学部の在校生の採用が制度化され、33年には帝国大学法科大学の学生を加えました。以降、依託学生ではない対象校の出身者を含め、大正期までは彼らが海軍主計官の主流となっていきます。

同時期、少主計候補生（少尉候補生相当官）に対する専門教育をするための常設機関を設けることも提議されています。その結果、明治32年5月13日に海軍主計官練習所が設置され、経理部下士・准士官や主計官への教育も行うこととなりました。20日、第1期の候補生学生6名が入所。8月には高等商業学校を卒業後、東京税務管理局に勤めていた牧三良（後に海軍経理学校長・主計中将）他4名の少主計（少尉相当官）が、第1期士官学生として入所しています。士官学生の初任は、専門学校卒は少主計、大学卒は中主計（中尉相当官）です。最初の帝国大学卒業生は、12月15日に入所した第2期生の永安晋次郎（後に海軍経理学校長・主計中将）他1名で、永安は31年7月に法科大学を卒業後、一年志願兵として陸軍に入隊、陸軍歩兵軍曹から海軍中主計に任官しています。



勝鬨橋の袂（中央区築地）にある海軍経理学校之碑

このように主計官養成の教育制度が定まったものの、初任が大主計（大尉相当官）で学生課程を経ない採用者が、明治32年から大正元（1912）年の間に6名確認されています。33年7月に東京帝国大学法科大学を卒業した柏木正文（後に呉海軍経理部長・主計中将）は、海軍省経理局附として採用され、10月に任官・佐世保海兵团附となっています。また、42年7月に東京帝国大学法科大学を卒業した高松長三（後に横須賀海軍経理部長・主計少将）は、海軍軍法会議の主理補（主理＝海軍法務文官）として採用され、主理を経て大正元年に武官に転官して

表 明治31年～40年刊行の『法政新誌』掲載された日本法律学校出身の海軍主計官

氏名 ^{※1}	卒業年 ^{※2}	少主計候補生	主計官 練習所学生	日露戦争期	最終階級 ^{※4}	備考
手島 直七	明治30年	明治31年8月20日	—	「宇治」主計長	主計中佐	
吉田 角郎	明治30年	明治31年12月27日	明治32年5月20日	「天龍」主計長→ 函館臨時施設隊附	主計中佐	第1期候補生学生
中林 守三	明治32年	明治32年12月18日	明治32年12月18日	「不知火」乗組	主計少佐	第2期候補生学生
中野 重春	明治30年	明治31年12月27日	明治32年5月20日	「赤城」主計長	主計少将	第1期候補生学生
柏尾 具包	明治30年	明治31年12月27日	明治32年5月20日	「山城丸」主計長→ 「小倉丸」主計長	主計中佐	第1期候補生学生
宇佐美 一夫	明治37年	明治38年3月30日 (少主計 ^{※3} に任官)	—	佐世保鎮守府附→ 「日進」乗組	主計中尉	昭和3年6月の校友会名簿 では弁護士

※1 氏名は『法政新誌』での掲載順。漢字表記については同一人物での誤記がしばしばみられるため、「海軍高等武官名簿」（防衛省戦史研究センター所蔵）によった。

※2 日本法律学校の卒業年は、「日本法律学校校友会々員名簿 明治四十年十二月調」「日本大学校友会 会員名簿 昭和七年四月現在」による。

※3 海軍将校相当官の階級呼称は、大正8年9月から将校と同様に統一された。例 主計中監→主計中佐

※4 最終階級は「昭和二十八年三月元海軍士官名簿」による、6名とも階級呼称改正以降退役のため新呼称の表記となっている。

おり、既定の採用制度以外にも柔軟に対応していました。

明治40年4月、海軍主計官練習所は海軍経理学校に改組され、初級士官教育は乙種学生となります。法律学校などの出身者からの候補生採用は、「日露戦争」開戦の37年を除き毎年実施されていましたが、42年4月、中学校（旧制）卒業生などを対象とした主計生徒の教育が開始されたため、同年6月が最後となりました。

日本法律学校（明治36年8月、日本大学に改称・改組）出身者に関しては、前回取り上げた『法政新誌』第7号以降、明治40年までに、海軍主計官として日本法律学校期11名と、本稿では対象としませんが日本大学期4名の校友が掲載されています。しかし、校友会名簿で確認できるのは、日本法律学校に入校した表の6名のみです。

内4名が明治30年の卒業生で、吉田角郎・中野重春・柏尾具包の3名が主計官練習所第1期候補生学生、手島直七は、彼らより4ヵ月早く海軍に籍を置いています。第2期候補生学生は明治32年12月18日に6名が入所、32年卒業生の中林守三が含まれています。彼らも、前号の10名同様に「日露戦争」での艦船勤務者は、中林を除き主計長を務めています。日本大学が専門学校の認可を受けた37年に卒業した宇佐美一夫は、「日露戦争」中の38年3月に少主計で採用され、中主計で予備役となり、その後弁護士になっています。

前号で、日本法律学校から将官となったのは豊島精太郎のみと記載しましたが、調査不足で中野重治も主計少将で予備役となっていました。中野は、豊島の1年前に海軍経理学校甲種学生を終えた後、イギリス出張や海軍省経理局第2課長などを経て呉海軍工廠経理部長。在任中に主計少将に進級し、2年後に予備役に編入されています。

なお、前号で紹介した少主計候補生で辞めた水郷^{みづの}謹一は、明治40年12月調の「日本法律学校校友会々員名簿」に、明治36年1月13日に死亡と記載されており、やはり健康状態が良くなかったようです。同様に、後年の名簿に記載がないと記述した中村耕三ですが、昭和3年6月現在の「日本大学校友会会員名簿」に「明治28年卒業」で「海軍予備主計大佐」とありましたので、日本法律学校出身と確認できた海軍主計官は、現時点では17名となりました。

明治22年以降、中等教育機関以上の卒業ならば一年志願兵となり、予備役陸軍少尉を志願することができますが、明治32・35・40年の校友会名簿で陸軍高等官は確認できず、高等武官はここで取り上げた海軍主計官のみ、高等文官は主理の宮地貴右（明治29年卒業）が唯一でした。

校友会名簿で確認できなかった5名も中村耕三主計大佐のように、未見の資料から確認できる可能性もあり、一年志願兵なども含め、今後も調査を継続していきます。（高橋）

※海軍依託学生は、高等教育機関の在学学生を採用し、月給が支払われ、夏季休暇期間などに体験訓練を行いました。明治期は、他に軍医学生・薬剤学生・造船学生・造兵学生がありました。

童謡「夕焼け小焼け」の作詞者・中村雨紅



中村雨紅
(八王子市郷土資料館蔵)

日本の代表的童謡「夕焼け小焼け」が、大正8（1919）年に作詞されてから、今年で100周年にあたります。作詞した中村雨紅（本名高井宮吉）は、日本大学高等師範部国語漢文科を卒業した校友です。

雨紅は、明治30（1897）年に、東京府南多摩郡恩方村（現東京都八王子市上恩方）に、宮尾神社宮司の高井丹吾、シキ夫妻の次男として生まれました。明治44年に恩方村報恩高等小学校を卒業し、東京府立青山師範学校に入学しました。そして、同校を大正5（1916）年に卒業すると、第二日暮里・第三日暮里・滝野川小学校の訓導（教諭）を歴任しています。第三日暮里小学校では、児童たちの道徳心や豊かな感受性を育てる情操教育を行うため、授業のかたわら学級文集を編集し、童話も書き始めました。大正中期は、「童謡童話運動」が起こり、児童雑誌『赤い鳥』や『金の船』（後の『金の星』）などが刊行された時期でもありました。

大正10（1921）年、高井宮の筆名で発表した童謡「お星さん」などが、児童雑誌に掲載され、それが野口雨情に賞賛されました。この頃から雨情に師事するようになり、筆名も中村雨紅と改めています。これは、雨情のようになりたいという気持ちから、「雨」の一字を貰い、さ

らにそれに染まりたいという意味で「紅」を付け加えたといえます。また、中村の姓は、当時叔母の嫁ぎ先の「中村家」の養子となっていたためです（大正12年に高井姓へ復籍）。

「夕焼け小焼け」が誕生した背景として、東京で生活していた雨紅が恩方村に帰省する時、八王子駅から16kmの山道を歩いて帰らなければならず、よく途中で日が暮れることがありました。そんな夕暮れの帰り道、郷愁や幼い時の感傷が加わって、この詩が作成されたといわれています。大正12年に、草川信が曲を付け『文化楽譜 あたらしい童謡・その一』に掲載されましたが、本書は関東大震災のため多くが焼失し、わずかに残った13部の楽譜が、人から人へ伝えられて広まりました。

大正13年、雨紅は、板橋尋常高等小学校へ異動なりますが、この頃に日本大学高等師範部国語漢文科に学び、大正15年3月に卒業しています。高等師範部は、昼間勉学の機会に恵まれていない者のため、夜間の中等教員養成機関として明治34（1901）年に設置されました。当初は修身法制経済科のみでしたが、大正9年4月に国語国文科が設置されています。小学校教員を中心とする勤労者が多数入学しましたが、勤務しながらの勉学のため退学者も多くいました。雨紅もこの時期には童謡や詩をほとんど創作することができませんでした。

雨紅は、高等師範部卒業直後の4月、さらに滝野川高等小学校に異動となりますが、雨紅の実践する自由教育的な活動は理解を得られず、創作意欲も失われていきました。そんな折、神奈川県立厚木実科高等女学校（後の厚木高等女学校、現厚木東高等学校）校長の誘いを受け、昭和元（1926）年12月に同校教諭となりました。この時、高等師範部で取得した中等学校教諭の免状が役立ちました。以降、昭和47（1972）年に75歳で亡くなるまで、厚



「夕焼け小焼け」歌碑



中村雨紅の展示パネル（夕焼小焼館）

木で過ごすこととなりましたが、終生故郷の恩方を忘れることはありませんでした。

昭和31（1956）年、恩方の人たちが雨紅の還暦を祝って、「夕焼け小焼け」の自筆歌詞を刻んだ石碑を、生誕地の宮尾神社の境内に建立しました。現在、石碑の近くには農林業体験型レクリエーション施設「夕やけ小やけふれあいの里」が設けられ、施設内の夕焼小焼館には雨紅のパネル展示があります。また、「夕焼け小焼け」に関連する碑は、生誕地の八王子市ばかりではなく、作曲家草川信の故郷長野県、若き日に教鞭を執った第二・

第三日暮里小学校、長く住んだ厚木市などにも建立されています。

なお、日本大学時代の雨紅についてはほとんど分っていませんので、今後調査を進めたく思います。（小松）

【参考文献】厚木市立中央図書館編『夕焼け小焼け 中村雨紅の足跡』（平成2年3月刊）

全国大学史資料協議会東日本部会2019年度総会

5月30日、東京経済大学国分寺キャンパス大倉喜八郎進一層館^{しんいつせう}ホールにおいて東日本部会総会が開催されました。総会では、2018年度事業報告・決算報告、2019年度事業計画案、予算案とともに、創立30周年記念展示について審議されました。記念展示は令和元年10月より、立教学院展示館で開催予定です。総会後には、東京経済大学名誉教授、



進一層館 1階展示室

公益財団法人大倉文化財団理事長村上勝彦氏の「大倉喜八郎の商業学校創立への思い」と題した記念講演が行われました。内地雑居への対応、近代的商業人の育成、アジアとの共生という3点を中心に、東京経済大学創立者で実業家の大倉喜八郎の生涯と学校創立についてご講演いただきました。その後、1階展示室の大学史展示を見学して2019年度総会が終了しました。



総会会場の大倉喜八郎進一層館

写真撮影：立教学院展示館 山本百合恵氏

大学史に関する情報については下記までお寄せください

日本大学企画広報部広報課（大学史） E-mail: nuhistory@nihon-u.ac.jp
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

活動報告

平成 30 年 11 月～令和元年 5 月
（大学史に関する活動）

○調査研究等

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| 11月8日～9日 | 全史料協全国大会（沖縄県那覇市：沖縄県市町村自治会館） |
| 3月19日～21日 | 学祖関係資料調査（山口県萩市） |
| 3月23日 | 上條慎蔵関係資料調査（長野県松本市） |
| 5月29日 | 全史料協関東部会総会（茨城県水戸市：茨城県立歴史館） |
| 5月30日 | 全国大学史資料協議会東日本部会総会（東京経済大学） |

○展示

- | | |
|---------|---------------------------------|
| 11月～12月 | 昭和戦前期の日本大学案内等（日本大学会館2階） |
| 1月～3月 | 日本大学創立100周年と学祖山田顕義の顕彰（日本大学会館2階） |
| 4月～6月 | 日大講堂と70周年記念式典（日本大学会館2階） |

○講演・報告

- | | |
|--------|---|
| 11月22日 | 日本大学藤沢高等学校・中学校 学祖及び大学史講演（同校大教室） |
| 12月8日 | 広島大学文書館研究集会「大学連携展示の可能性と課題」（広島大学） |
| 12月13日 | 高等学校・中学校等教員採用内定者オリエンテーション
「付属高等学校等の歴史について」（日本大学会館） |
| 3月6日 | 新規採用教職員研修学祖講演（日本大学会館） |
| 4月5日 | 日本大学理工学部 大学史講演（同学部船橋校舎スポーツホール） |
| 4月9日 | 日本大学豊山高等学校・中学校 学祖講演（同校多目的ホール） |
| 4月11日 | 日本大学東北高等学校 学祖講演（磐梯熱海温泉「華の湯」） |
| 5月8日 | 日本大学鶴ヶ丘高等学校 学祖講演（同校体育館） |
| 5月10日 | 日本大学危機管理学部 大学史講演（三軒茶屋キャンパス1号館） |
| 5月16日 | 日本大学藤沢高等学校・中学校 学祖及び大学史講演（同校大教室） |

日本大学大学史ニュース

第17号

令和元年7月8日 発行

編集・発行 日本大学企画広報部広報課
〒359-0003 埼玉県所沢市中富南4-25
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

印刷 株式会社 日本大学事業部